

日付のある雑詠と随想

海蝶夢話

卷の八

二〇一三年

谷川
修



昔若い才気あふれる人が、「人生の価値が最低となる老年期になる前に、すぐさま屋根裏部屋にあがって詩人の生活をはじめべきだったのだ」と警告していたのを、当の老年になつて知り、その人が若いときにやった土いじりを体力が最低になつて始めた者がここにいる。その老夫は、ただ象徴的に語られたにすぎない「詩人の生活」をまねようとするほど愚昧でもある。だが、人間の判断力を掘り起こした哲人が、「およそ美学的判定の旨とするところは、自然はなんであるかということでもなければ、また自然の目的は我々にとつてなんであるかということでもなくて、我々が自然をどのように受けいれるかということにほかならない」と説いている。また、詩は、「構想力を自由に遊ばせ」、「心を開張あるいは強化する」とも言っている。すると一縷の望みがないわけではない。自然を受けいれて遊ぶことなら、愚鈍でもできるかもしれない。「心意識に生気を与え」、「遊びつつ悟性に營養を給する」ことができるかすれば、衰えている者にこそ、それを樂しむ効能があるわけである。老哲人の言葉を信じて、片々のつぶやきを書きとめる励ましとしよう。

一月四日

玉ねぎに寒肥をやり事始め

一月五日

社会学者ウォーラスティンは、年末と新年のコメンタリーで、去年の年頭と同じ問題を論じている。世界システムを考え続けてきた人は、すべてのシステムはいずれ平衡状態から離れ、構造的な危機を迎えることを知っている。そして、経済・社会・政治が不安定に揺れ動いている今が、その危機の時代だというのだ。たしかに、わたしのような者にもそのように見える。世界が今の消費を続けることができなくなっているのだ。ウォーラスティンは、格差の広がった状態をセイフティ・ネットのとりくずしでしのごうとしているが、資本制に変わるシステムを選ぶための大きな政治的な闘争になるだろうと予想している。選択肢としてあるのは、現在の富の偏在を維持する権威主義か、比較的に民主的で平等なシステムか。

そういう時代に、この国で危機を深めることが行なわれようとしているのは驚くべきことだ。それでは解決できない深刻な事態が眼の前にあるのに。空しいかもしれないが、力のない翅のすりきれた蝶は、はばたくしかない。コメンタリーの文末が、蝶のはばたきが世界へ影響を及ぼすというカオス理論の比喻を用い、小さな蝶である各人が今出会う問題に立ち向かうことを説いているから。

一月八日

寒の波止顔のほてりを冷ます鷺

一月十四日

寒梅に衰微を救うきざし嗅ぐ

一月十六日

判じ物読んで凡夫は上の空

鉢持たぬ行脚の道は急ぎ足

自律神経失調者が「批評の金字塔」に目がくらんで、血のめぐりをよくするために毎日歩いている。

一月十八日

瞳孔を開き世界を見つめれば事々物々があり方変える

一月二十三日

柳家小三治の落語を聴いた。名人に気の毒なことに、大きな音楽堂で、打ち解けた話しかけの味わいが削がれたように思う。「枕」で至高の権威も笑いにし、落語の伝統を立派に引き継いでいる。新年の演題が「死に神」。

名人の話芸を聴いて初笑い我がろうそくの長さも知らず

一月二十九日

本州西端の大きな湾の小さな入り江の丘に、その像は立っている。名高いその人にまつわる伝説を、町興しのために利用して建てたものだ。真っ白い石でつくられた美人像である。そこには鎌倉時代に築かれた墓がある。多数の石を一辺五メートルくらい方形に積み重ね、その上に五輪塔が置かれていて、それなりに手間のかかったつくりに見える。

ここには八百年初頭の創建と伝えられる寺がある。かつては末寺をもつかなりの寺院だったらしい。古い釈迦如来像と阿弥陀如来像が安置されていた。古びているけれど、丁寧な作だ。パンフレットによれば、国の重要文化財で、胎内から発見された銘は、文永五年（二二六八年）に法橋院好という仏師が彫ったものという。同じ鎌倉時代に彫られた四天王像もある。寺伝は脚色してあるのだろう、興味深い物語になっている。二体の仏像は、美人像の主を吊うために中国からもたらされ京都に置かれていたが、美人がこの地に葬られていることが分かり、レプリカをつくってここに安置することになった……と。家に帰ってインターネットで調べたら、京都の二尊院にも、鎌倉時代製作の阿弥陀如来像と釈迦如来像とがあり、そちらも重要文化財に指定されているという。しかし、そちらは作者の名が書かれていないようだから、身元はこのいなかの二尊院の仏像の方がしっかりしているわけだ。京都の二尊は、左右が鏡像対象になるように、それぞれ左手と右手を挙げておられる。こちらのお二方は、共に右手を挙げて、光背の形も違い、少し背が高くいらっしやる。それに、京都の二尊院にあの中国女性の伝承は

ないらしい。

寺伝を書き残した僧は、白楽天の「長恨歌」を知っていたのだろう。きっと、美人を失った人が道士に亡き女性を尋ねさせた物語をふくらませて、秀作である二尊の仏像に結びつけたのだ。それを助けたのが、先の五輪塔の墓が中国からの漂着者のものだという伝承なのだろう。たしかにこの海岸には、対馬海流に乗って大陸からの航海者が流れ着くことがあったかもしれない。文永五年は、元軍が最初に攻めてきた年の少し前だ。そういうことも、中国とのかかわりを想像させるヒントになったかもしれない。わたしも、その幻想的な物語に乗せられて想像してみた。

もうお分かりだろう、その美人とは楊貴妃のことだ。町興しを図った人たちは、像をつくるのに現代中国の人たちを巻きこんだ。楊貴妃像は、彼女の死んだ陝西省馬嵬に建てられている像のコピーだそうだ。等身大よりも少し大きい。中国公使が、台座の文字を揮毫している。ういえば、中国で日本に楊貴妃の墓があると話したら、誰だったか忘れたけれど、そのことが載っている本があると教えてくれた。この楊貴妃像を制作することがニュースになって、中国で人の知るところとなったのだろう。海を見ているふくよかな五輪塔に、今日は寒さが和らいでいる。

楊貴妃と二尊の古佛春を待つ

二月二日
隊列をなし魚泳ぎ水ぬるむ

早や桜展望公園まず目覚め

二月四日
立春に身仕舞をした鳥の像

二月十日
春節をことほぐ声か鴟鳴く

イナを釣る子供のびくを覗きこむ

二月十三日
春尋ね入り江の奥の線路脇

人乗せて鉄路いずこの春へ行く
(乗客のまばらなたった一輛)

二月二十七日
泥さぐり蓮華を咲かす根を求む

二月二十八日
シリコーンで身の欠損を補修して春陽の中に歩み踏み出す

三月二日

里山で妻の茶花に椿採る

三月五日

虫となりまた新たなる日の中へ

三月九日

プロ野球オープン戦のチケットが手に入ったので、孫たちと見に行った。あまり緊張感のない試合を気長に見た。野球というのは動きの少ないゲームだと改めて思う。それを、とにかく盛り上げるために考えつくあらゆる趣向が凝らしてある。大量消費時代の現代人は、はかなく消えることに、それと知りつつ騒ぎ立てて参加するのである。もともとローマの昔から、そういう享楽にふけてきたのではあった。おりしも、好景気が来たと報道が煽り立てている。経済のような人間生活に大いに関係することも、米欧日の先進諸国が小手先の操作をするだけで活況になるのだから、人間はそういうふうに出てくるのだろうか。黄砂が飛んで来て、前途は霞んで見通せない。

蘭山の眺望乗せて黄砂来る

三月十一日

土降つて華山の木々が動き出す

(ここ日本の華山でも)

三日留守をして独り帰宅し、少し疲れの残る晩に、BS放送でイギリスBBCフィルムズの映画を観た。寝入るまで印象を留めるほど、見ごたえのある映画だった。

日本語の題名が「リトル・ダンサー」。ボクシングを習っていた少年が、同じ練習場を見たダンスに興味を示すと、ダンス教師がその才能を見抜いて手ほどきをし、少年は伝統あるバレエ学院に入学して優れたダンサーに成長する、という物語である。映画は、その成功物語を、登場人物たちが構造をもつ社会に立ち向かう中で描き、厚みと陰影あるドラマにしている。時代はサッチャー政権の一九八四年。炭鉱の町で、炭鉱労働者の組合がストライキをして警察隊と対峙している。少年の父はその炭鉱労働者である。つましい生活の中で息子にボクシングを習わせたのは、身を立てるのに役立つかも知れないと考えてのこと。それなのにひそかにダンスを練習する息子を父は許さない。ところが、中流階層だが夫が失業中のダンス教師は、自身の問題を引きずりながらも、少年の才能を開花させようとする。ついに父親は、息子に才能があるという言葉に賭ける。息子をロンドンに行かせるお金をつくるために、あわやスト破りしようとしてまで。少年も自分の社会的な位置を知っている。このときの少年俳優のひきしまった顔は威厳があった。主演賞をもらったというのがうなずける。

長々と筋を追ったのは、ドラマが薄っぺらな物語ではないことを言いたかったからである。

最近しばしば、同じ世代の人から、日本のテレビが面白くないという言葉を聞く。韓国のドラマをたくさん輸入していること一つとっても、この批判が的外れではないことが分かる。だから、たまに優れた外国映画を観ると感動するのである。

あるいは、単にドラマ作りの問題だけではないのかもしれない。「リトル・ダンサー」を印象深く感じたのは、日本の社会とそこでの人間の行動がヨーロッパと違っているからではないか、とも思う。人間が強靱で、信念ある行動をする、少年でさえ。自分をふり返って最も足りないところだ。そういうところに感動するからには、自己を確立して保つことは人間一般が見習うべき美德なのだと思う。疲れていたわたしの目を覚ましてくれる映画だった。

三月十八日

空は暗くうすら寒く見えるけれど、

気温はたしかに低くはない

馬酔木の白い花は華やかではないけれど、

かすかに光を発してたしかに自足している

池では金魚が身じろぎもせずにいるけれど、

小糠雨はもの皆を動き出させる力をもたないか

わたしの詩情は涸れているが、

今日の雨はやわらかくないか

三月二十日 大船が滑ってぬつと春の江に

講祭り霞を急ぐむら雀

昨晩から、きだみのる著『気違い部落周游紀行』を読み始めた。都会出の高尚なインテリとは違い、わたしは彼の人のいう村落共同体の英雄の一人にすぎないから、二十一世紀の今でも地下の風習から抜けきれず、彼岸の中日の今日は墓参りに行った。じつは、忙しい家だったわが家では、両親が仏教学の博士の僧に帰依する厳格な真宗信徒だったが、彼岸に墓参りはしていなかった。代わりに貧しい集落では、祥月命日だけでなく月々の命日に精進の朝食である。都会人の風習だと思ってきた彼岸の墓参りに行くのは、テレビで見て行動に誘われるから。それでも墓の前に立てば、両親や記憶にないけれどわたしを見た祖父母や兄のことを考えて神妙になる。わが家には墓が二か所にある。一方に行つて古い方へ行かないわけにもいかないの、めんどうという気持ちを抑えて出かけることになる。

その折、隣家の玄関に大きな日の丸の旗が立っているのに気づいた。見ると、「何々講」という文字が書いてある。ああ、今日は弔い講の講祭りの日なのだ。わが家も別の講に入っていたが、引き車で遺体を運ばなくなつて久しく講仲間の出番はいよいよなくなつたのに、飲食の準備をする当番に負担を感じたので、ここに帰る前に脱退したのだ。似た考えの人が多かった

のだろう、その講は二三年内に解散になった。隣の話は、この春の会食を惜しんでまだ残されているのである。講の組織の仕方はおもしろく、近所で講を組むのではない。少し前の同姓の親族が別の講に属しているから、古い組織ではない。日の丸の旗をつくっていることからして、近代天皇制の盛んな頃に組織したのか。ところで、この講は氏神の神社につながっていて、土地神を祭るお札が配られる。埋葬は氏神とかかわるのだろうか。こちらの由来がどのくらい古いのか知らない。(何日かして知ったが、隣家は当番を果たすと講から退会したそうだし)。

桜餅を食べながら思案をめぐらせば、わたしが今日していることは、きだみのる先生にフランス流の気の利いた批評を受けるのだろうかと思う。現代の英雄は、それを真似て、今の日本と世界に進行中のあまり正気とも思えないできごとに評言を吐くべきなのかもしれない。先生に批評された地下のありさまを言えば、「何々本家」と書いた立派な墓に、都会から来たらしい人が参拝していた。人類学の先生が腑分けをすると、本家を誇るのと同類の気持ちはまだわたしの中にあるだろう。幸い、墓石に彫る文字を自分で書いた父はそういう趣向に走らなかつた。さて、急な山の斜面にある集落の墓地に來れば、そこに生まれて骨をうずめる個々人よりも、いなかの古くからの社会共同体の大きな変化に思いが行くのを止めがたい。手を加えなければ藪になり斜面を登らなければならないことから、半分近くの家がコンクリート造りの共同墓地を建て引越してからもう五十年になる。激動の時代は、葬祭というようになことにまでその力をふるっている。きだみのるが現代では使用禁止の刺激的な名をつけた日本人の、精神と行動

も少しずつだが変化せざるをえない。けれども、古い方の墓のある墓地も半分以上が無縁墓だ。われわれの時代よりもっと昔から村落共同体は変化してきたのだ。それが人間の心に与えた影響が小さかったと言いきれるかどうか。

最初に掲げた句で、二・五マイクロメートルの微粒子が降るのに雀が急ぐのは、講祭りに出かけるためではない。雀たちはわたしと同じく、村に住んでいても講内に入っていない。春になつて忙しいのである。

三月二十二日　古希祝う同窓集う写真には「一瞬一生」と彫る石碑立つ

三月二十八日　散る花と鳶の影追う孫と祖父

時に会い手植えの楓花開く

四月三日　陽はあふれ汽水を上る花筏

四月四日　意味探し地を這う者に回帰する

四月十三日

連呼する声海に消え春暮れる

四月十四日

列伝を読んで林檎の花撫でる

イギリスのM・サッチャー元首相が亡くなった。イギリスでは在職中の施策への評価の一方で批判もあるらしい。そのことが、プルタルコスの『列伝』についての感想と結びついて、われわれ日本人の人物評価のあいまいさへ思索を導いた。英国では「魔女は死んだ」という歌がはやり、BBCはその音曲を時節柄悪趣味だとして放送を自粛。

四月二十一日

陸奥みちのくを名残の雪と花が訪う

春戻せ冷雨をついて神輿行く

若者の減った浦でも春太鼓

老田夫西瓜を掩い拙守る

五月五日

花器とバラ描いて孫の絵に力

五月八日

対岸に草焼く煙我もまた梨を摘果し日を整序する

五月十日

野いちごの棘をいとわず手を伸ばす

五月十一日

ばらの花行く時と散り海熟す

五月十七日

饗応を終え野いちごの甘味増す

五月二十一日

水を遣り日々野いちごを摘む荒地

五月二十七日

大風にじゃがいも屈す事理がある

人の世の法か母子が飢えて死ぬ

政治と社会深く病む国

六月七日

不法投棄物を片付け玉の汗、禊する

市役所の人が三人来た。小さな鳥居を立て、脇に「清浄な行いをする人は恵みを受けます。不浄な行いを為す者は天罰を受けます」と書いた立札を添えるつもり。まことに、わたしもこの教えに従わなければならない。

六月八日

園丁の仕事は尽きず蝶育つ

(天罰はわたしに下り、毛虫の粉で発疹)

六月十五日

微笑する未生の蓮華日々に待つ

六月十九日

濡れ縁を陽に力得た竜が行く

ここは五月は旱の土地だ

六月だつて油断できない

果菜園「荒地」の園丁は

真つ白な一枚の画用紙になりきれない

ただ自然の無情にしみじみと感じ入り

何色かかすかに染まりつつある

書棚の片隅に置かれたままかなり変色した本を救い出して読んだ。画家風間完の『エンピツ画のすすめ』、技術の手引きではなく小さなエッセイ集。こつこつと長く続ける中で会得ということが起きる、と説く。「教養は至高を求めてこそ教養」という箴言があった。

六月二十一日 華やぎを柿茸落^{こけらおとし}で雨の夏至

新築なった歌舞伎座で観劇。演目は「ことぶき曾我対面」と「つちぐも」。こけら落しにふさわしく、舞台上に多くの役者または音曲と唄の人が整列し、演者の衣装の色彩も鮮やか。わりあい単純だが腹芸のある筋書きが、各役者の存在を強調できる間合いをとってゆつくり進行する。様式美が際立つその筋立てに自分を溶けこませて感情を動かすことで鑑賞が成立するのだ。歌舞伎の典型を観ているのだろう。ほかの演劇との対比に思いが行く。文楽との微妙な差異を感じる。テレビで観て感動した中国の演劇では、簡素化された舞台でもう少し素直な人間性を歌い上げる…。とまれ、わたしは確かに楽しんだのである。華やぎをもらって劇場を出た。

六月三十日

飢えた子のニュースをよそにスモモ食う

ソクラテスの末裔の国の教室で空腹の子が倒れた、と。

七月一日

北極圏を撮ったドキュメンタリー映画「ホワイト・プラネット」を観た。

自然は思議もかなわぬほど大きく
生き物は不気味だけれどいとおしい
わたしは圧倒されてただ息をのむ

七月二日

草刈るとマムシに言つて藪に入る

老騎士は夏草歌う夢の中

自転車を押して通りかかった貴婦人が、「たいへんじゃねー」と声をかけてくださった。顔を網でおおう兜をかぶった老騎士よりも十あまり年上だろうか。平定できたのは、小さな畑の六割ばかり。疲れたので、昼食後シヨパンのピアノソナタをかけて横になったが、葬送行進曲になつても眠りに入れなかった。実に人間の生もまた不可思議である。

七月四日

混乱するエジプトで、選挙で選ばれた政権が倒された。期限付きで予告した軍隊のクー・デター。近世以来の歴史に刻まれた困難に苦しんでいる。

日本では参議院選挙の告示。情報過剰の社会で半ば結果が予告されていて、しかも、近代以来の歴史の影が表に現われようとしている。現在世界で起きていることは、退潮しつつある世界資本制が何か新しいシステムへ構造変化しようとしているただ中のできごとである。各国での政治動向がその世界規模の政治闘争につながることを考えなければならぬ——と言う人がある。

蝻螂の子と雷鳴におののいて

七月七日

人形に人を感嘆さす力
彼我を操る浄瑠璃の楽

新しい企画として始まった「近松文楽」を観た。演題は、「こもち山姥、郭嚙の段」と「平家女護島、鬼界が島の段」。前者は、素浄瑠璃という形式で、三味線と太夫の語りだけで聞かせる物語。この音曲は世界で極めて特異なもの。正直に白状すれば、音楽としてのよさをほとんど理解できない。昔の人はずいぶん高尚な鑑賞能力をもっていたものだ。ある程度の筋を知っていれば、三味線の曲に乗った太夫の抑揚ある語りで、想像力を膨らませることができたのだ。伍子胥や紀信の名まで出てくる語りを聞き分けるには、あらかじめ文章を知っていなければ

ばならなかつただろう。観客は誰かに解説を聞くということもあつたと考えられる。

後半の人形劇の方は、近松門左衛門が文章だけでなく劇作家としての構想力にも秀でていたことを示す作品。人形が、語りだけでは表現できない視覚的な効果を鮮やかに演じる。この種の誇張されたクライマックスは、歌舞伎のように役者が発声するよりも、人形浄瑠璃の方によい人の心を揺さぶる力があるだろう。音曲としてはよさが分らないと言つたばかりだが、観る者の想像力を喚起する力にひっそらわれた。せりふが物語に一体になった文章を舞台の外から語る形式が独特の力をもつことを教えられた。中国の演劇の、語の数を整えて韻律のある「詩」を歌うやり方が別の喚起力を發揮することも考えさせられた。

七月十二日

乾きつつ歩むみみずに遠い道

(不明の目的地に到着する前に…)

水撒けば園丁の身にあせも湧く

七月十三日

教育を受ける権利を主張する少女の声は凜凜として

去年頭を撃たれた少女が十六歳の誕生日に国連でスピーチ。

七月十四日

世話焼きも果て今は聞く阿弥陀経

七月二十一日　この国で歴史が見せる冷酷さ、きのう花火のあつた海見る

七月二十二日　徒手にして旱る荒地の実り待つ

熱す地に草木の息が時刻む

七月二十八日　園丁に休息授け慈雨が降る
(東北五十kmのところでは無慈悲な豪雨)

雨上がる波止に船虫さつと散る

七月三十日　炎天に網張る蜘蛛の持久力

八月十日　四日留守をして夜八時過ぎに帰った室内の温度が三十三度。

るす守る部屋でガリレイ温度計玉一つ浮かべ氣息を保つ

八月十四日　園丁が誇大に語る実の見込み
(その園丁は饒舌でもある)

八月二十一日

孫と獲た蝻の味わい遠い夏

八月二十四日

今日からは残暑と呼べる恵み雨

八月二十五日

蜻蛉に倦まずに語る浄水機

「知るということは、与えられたものをどこまでも論理的に規定しつつけることではない」と言う人がいれば、「観自在菩薩の行深般若波羅蜜多時は、渾身の照見五蘊皆空」と観じた人もあった。

八月二十六日

「昨日、土の中で暮らすモグラが道に斃れていたので海に流し、今日は、池の金魚が果っていたので海に返しました。おととい・昨日と、三週間ぶりにかなしの雨が降って、それまでの記録的な猛暑と旱を追い払って突然秋になったせいでしよう。かつかつ生きている者には堪えたのでしよう」。「それはちつとも不思議なことではない。それより君もくたびれた顔をしているが」。「はい、涼しくなったので、耕作放棄地を見回って少し草取りをしたのです」。「そのぐらいのことで息を切らすのかね。生を終える者が出て、季節が変わり、また

九月十二日

青北風を濃いコーヒーを飲んで観る
鳶鳴いて海山空に秋の色

大内義隆が陶晴賢の反乱を逃れて北へ走り、九州へ落ちのびようと船の便を求めた漁村が近くにある。その北隠居という家へ、果菜園のための稲わらをもらいに行った。田は商人(あきうど)と呼ばれる地にある。戦国時代にはこちらに集落があつて、商人という地名が教えるように単なる漁村ではなく、海運にも従事していたらしい。豊臣秀吉の朝鮮遠征に船を出したという伝承も残っている。そこが今は水田になって、北の隠居が耕しているのである。この家には屋号にふさわしい慣習がある。主が歳をとると家業の漁業と家計の采配を息子に譲つて隠居する。最近二代の隠居は七反の田をつくつている。今日は、刈り取りが終わつたばかりの田で、隠居

仕事を始める者もいる。ずっと昔からこの世界で起きていることだな。「でも、こんな些細なことを書きつづりながら日を送るのが人生なのでしょうか?」。「うーん」。

は稲わらをしごいて整えていた。聞けば、正月のしめ縄に使うのだという。今から準備しておくのだ。家や船に飾るためにたくさん要るらしい。長い歴史を積み重ねた土地に、こうして人間の生活と文化が維持されている。その象徴的な景色を、夏、畦の草を刈りとったあとに行けば目にすることが出来る。すぐうしろに山をひかえた水田は、名工の構想した庭園のように美しい。

家にもどってわが果菜園の梨とぶどうをもいだ。明日、孫たちに持つて行く分だ。梨を四個、普通の大きさに育ったのは一個だけ。ぶどうはほかのよりも熟した三房を選んだが、それぞれ半分ほどしか色づいていない。それでも、特別喜ばしい収穫である。両親が一本だけ植えた梨は、共に生きる仲間を欠いて三十年間実をつけたことがなかったけれど、新たな木が加わって花を咲かせ、今年初めて実を結んだのだ。来年からは満足のいくものが増えていくと期待しよう。

時熟し父母の形見を授く梨

九月十九日

境内で子猫が果てる秋彼岸

(母親が行人にまといつく)

白道を海に開いて招く月
（彼岸山上中秋望月、開道海上至我的庵）

九月二十一日
月下美人昨夜の月の御形見

「降らんなー」秋のあいさつ淡々と
（あきれて、あきらめて）

九月二十三日
まれびとに奇跡のりんご饗応す

九月二十八日
落日が黄金郷を照らし出し空と海とを結ぶ虹立つ
（黄金郷は彼岸に）

十月十一日
午前、郵便物をポストに出しに行つて、そのまま半年ぶりの長い散歩。

川沿いの歩道を途中でひき返し入口まで帰つてきたところで、農道と仕切る小さな柵に小鳥が四羽いるのに眼がとまる。幾度となく通っているのに初めて気づいた。ステンレス製の柵から動かない小鳥たち。次に、知り合いの老婦人が県道の歩道の雑草を抜いているのに気づく。近寄つて、今年の天候やなにやかやを話す。今は大根などを育てている、と。雨が上がったので出て来たという。腰が曲がつて手押し車で移動するのだ。動けなく

なつたら野菜はそのままほっておく…、息子夫婦のいる人は淡々と語る。

白鷺も青鷺も独り秋の川

再生を意志しひこばえ穂をつける

十月十六日

小説を読んで午睡し目覚めれば老夫の脳に血の巡る音

十月二十四日

乱打する雨とピアノにもうろうと煙る街道並足の騎士

行く騎士は蛍街道憂い顔アワダチ草の衰微する野に

想念でまた乱舞する曲に酔い行く手の山を過る霧見る

玄海が雨を抱いて暮れる秋

十月二十八日

ボラの飛ぶ波紋を溶かし暮れる海

(蜜の色)

十月二十九日

母からのこれも形見の菊を採る

十月三十一日

秋耕し命はぐくむ畝つくる

天井で思索にふける秋の蜘蛛

十一月五日

四日前、NHKのローカル番組が、山口市で演じられたユニークな試みを放映した。W・イエーツの作品「鷹の井戸」の日本語訳を野村萬齋が朗読したあと、連続して、翻案されてできた新作能「鷹姫」に移り、萬齋は洋服のまま能役者の演じる鷹姫と渡りあう。坂本龍一が、朗読のときも、能に移ってからピアノを弾く。能と伴奏する鼓・笛に対抗するように指で弦をはじいて演奏した。舞台は、台上ではなくモダンな施設の平面の床。「メディア・アート」のディレクターが、薄暗がりにも効果的な光を投じ、永く溷れていた井戸に湧いた水を淡い映像で床に表出するなど、不思議な色彩を能に加える。作品自体を始めて知ったが、全体的にとっても印象深い実験だ。詩人で劇作家のイエーツはもともと日本の能に影響されていたというから、日本で能になるのは定まっていたのかもしれない。彼は、神秘

主義秘密結社のメンバーでもあったらしい。能の夢幻的などころと通じる心性をもっていたのだろう。夢幻と銘打てば、演劇は特別の効果を發揮して人を浮遊させる。

分身を連れて川面に歩を運ぶ背を温める夕陽に乗って（徒歩かの老騎士）

十一月十一日

秋寂ぶの時代身にしむ、黄菊採る

独り居の時雨を見舞う鳥に礼（翼に一つ白い斑点をつけた茶色の小鳥）

十一月十三日

陽を待み狐嫁入る花はツワ

十一月十五日

コスモスにコスモス一輪、茶を点てる

大宇宙の中、内海をなす小宇宙に残る白い一輪、波紋が心の海に広がる。

内海を静めはだえ膚はだえに小春の陽

十一月十六日

到来のイカを捌く手不器用に二三の些事を為して過ぎる日

身から出たさびを始末し生き物の立ち位置悟り初冬迎える

冬の蠅捕えて蜘蛛の思索成る

十二月二日

もぐら追う風車聴き草を取る

凸凹になった玉ねぎの畝の草取り。風車は隣家の畑にある。

わが車迫つても千鳥千鳥足

十二月七日

不慮の死で住職が逝き寺院葬猫も参列银杏散る下

十二月十五日

防腐剤塗る者捕え歳暮れる

十二月十七日

花乗せた舟訪れてこの冬もわが内海に生氣加える

根一つの歯の片割れも失って一つまた一つ身仕舞の日々

冬の月見者の見で我を見る

十二月二十日

乱れ雪なだめて受ける冥い海

十二月二十二日

豚・鶏と薫習を待つ冬至の日

(一日がかりの燻製作りに参加)

実るユズと湯船に浸かり身を癒す

十二月二十五日

窓を拭く姿一瞥する猫に身の軽重を測られている

不自由に世は偏極し年暮れる

十二月二十七日

ほねをうずめるのはここだ

ただまっとうにいきること

心意をすこしふるいおこして

十二月三十一日

孫二人とレモンを採つて、その足で波止場の方へ。渚で貝殻拾いに参加してツメタ貝を見つけた。小さくて形がくずれていない。海岸道路ができて死に絶えたと思っていたが、突堤の付け根に残ったこの小さな渚で生をつないでいるとみえる。アサリ貝とツメタ貝がよく採れた昔を懐かしみ、餌のアサリが激減してツメタも生き難い世を思う。

大晦日渚で拾う貝殻にその生涯の物語聴く

手ずからの燻製腹に除夜の鐘

(一〇八の煩惱を燻して追い払う)

二〇一四年 正月
白江庵 謹製



『森の生活』 H・D・ソロー

私が森へ行ったのは、思慮深く生き、人生の本質的な事実のみに直面し、人生が教えてくれるものを自分が学び取れるかどうか確かめてみたかったからであり、死ぬときになって、自分が生きていなかったことを発見するようにはめにおちいりたくなかったからである。

……

草取りをしてやる相手はもはやマメではなく、マメの草取りをしているのも私ではなくなっていた。

